

「ずうっと、ずっと、大好きだよ」教材解釈

渋谷 歩

「ぼくたちは、いっしょに大きくなった。」の文から、ぼくが赤ちゃんのころにエルフも赤ちゃんで、ぼくはエルフの尻尾をつかんだり、エルフがぼくをなめたり、いっしょに転がったりしながら二人の日々が始まったのだろうと想像できる。ぼくは毎日エルフと一緒に遊んだし、毎日一緒に寝た。ぼくとエルフのしている夢は一緒なんだと思うくらいエルフはぼくにとって近い存在であり、生まれてから膨大な同じ時間を共有してきた存在であった。

しかし、りすを追いかけたり花壇をほりかえすのが好きだったエルフがどんどん太っていき、散歩を嫌がるようになった。人間よりいぬの方が早く大きくなること、先に老いていくことはぼくだって知っていたはずである。だから、エルフが年をとったことはわかっていた。けれども、じゅういさんでさえできることは何もなかった。「エルフは、年をとったんだよ。」このじゅういさんの言葉でを聞いて、年をとるということは、その先にはいつか「死」があるんだということにぼくは気づいた。

ぼくは、エルフにできるだけ今までと同じように生活をさせたいと思ったはずだ。大好きなエルフに、「死」が近づいているんだなんて、できるだけ感じさせたくない。だから、エルフはぼくの部屋で寝なくちゃいけないし、寝る前には必ず「ずうっと、大好きだよ。」と言ってやった。今までだってぼくは「大好きだよ。」と言ってきたけれど、今だけじゃなくて終わりなく好きだよって言うておきたかった。ぼくが寝ている間に逝ってしまったとエルフの心にこの言葉が残るように。そして、そうすることがエルフとの残りの時間を悔いなく過ごすために、僕自身にとっても必要だった。

エルフは気にしないと分かっていたけど、隣の子にいらないと言ったのは、「エルフ、ずうっと、ずっと、大好きだよ。」という気持ちで、まだ変わりなくあったからだ。まだ小学生ぐらいなぼくと一緒に、死ぬまでの一生を過ごして、ぼくにたくさんの喜びをくれ、残りの時間にどう寄り添えばいいかを考えさせてくれたエルフは、ぼくにとって世界で一番すばらしい犬です。